

〔實方朝臣集〕小一條殿の人々、なぞく物がたりす、
かたすまけずの花の上の露

といひけるに

すまひ草あはする人のなければや

〔枕草子七〕故とのなどおはしまさで世の中にこと出き物さはがしく成て、宮又うちにもいらせ給はず、小二條といふ所におはしますに、何ともなくてうたてありしかば、久しう里にゐたり、御まへわたりおぼつかなさにご、猶えかくてはあるまじかりける、○中日ごろになれば、こゝろばそくてうちながむるほどにおさめ、文をもてきたり、略御かへりまいらせて、すこしほどへてまゐりたり、いかゞとれいよりはつ、まして、御木丁にはたかくれたるを、あれは今まいりかなどわらはせ給ひて、にくき歌なれど、此おりはさもいひつべかりけりとなん思ふを見つけては、まばしえこそ慰むまじけれなどのたまはせて、かはりたる御けしきもなし、わらははにをしへられしことぞなどけいすれば、いみじくわらはせ給ひて、さる事ぞ、あまりあなづるふる事はさもありぬべしなど仰せられて、つゝあでに人のなぞく、あはせしける所に、かたくなにはあらでさやうの事にらうく、しかりけるが、左の一番はをのれいはん、さ思ひ給へなどのむるに、さりともわるき事はいひ出じとえりさだむるに、其詞をきかんいかになどとふ、たゞまかせて物し給へ、さ申ていと口おしうは、あらしといふを、げにとおしはかる、日いとちかふ成ぬれば、猶この事の給へ、ひざうにおかしき事もこそあれといふを、いさしらず、さらばなたのまれそなどむつかれば、おぼつかなしと思ひながら、其日になりて、みなかた人のおとこ女あわけて、殿上人などよき人々おほく居なみてあはするに、左の一ばんにいみじうよういしもてなしたるさまの、いかなる事をかいひ出んと見えたれば、あなたの人もこなたの人も、心もとなく打まもりて、な